

論文内容の要旨

(別紙1-1)

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 氏名  | 李叶                      |
| 論文題目  | 日中両言語における数字を含む四字熟語の対照研究 |
| 要 旨   |                         |
| <p>本論文は言語学と文化学の視点から日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を対照研究し、数字の拡張的意味と四字熟語の比喩的意味が如何に関連するか、また日中両国におけるそれぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的なものが数字を含む四字熟語の意味に対して如何に影響しているか、数字を含む四字熟語の比喩的意味が文化に如何に反映されているかなどについて究明した。</p> <p>日中両言語における数字及びそれを含む四字熟語に対する先行研究は大きく三つに分類することができる。①数字に対する通時的研究で、数字の語形や意味などの歴史的な変遷、即ち「数の語彙史」の研究;②数字に対する共時的研究で、主に言葉と文化の視点から、数字自体及び数字を含む四字熟語が表現上果たす比喩的・象徴的な役割、それを通じて表わされる感情や物の捉え方などを考察したもの;③数字及びそれを含む四字熟語の日中対照比較を研究テーマとして取り上げた研究である。</p> <p>全般的に見ると、日本語における研究では通時的研究が多く、研究内容を見ると、主に日本語における数字の発展史に関する研究である。数字を含む四字熟語について、その数は少なく、あまり進んでいないようである。対照研究の面においては日英の比較対照がほとんどで、日中対照研究がテーマとして取り上げられたケースは少ない。これに対して、中国では比較的以前から「数字を含む四字熟語」が研究テーマとして取り上げられ、研究は進んでいる。しかし、意味、用法の側面からのものがほとんどである。対照研究では日中対照研究をテーマとして取り上げるケースがいくつかあるものの、主に一つの数字、もしくは二、三個の数字に絞って行われたもので、数字全体を体系的に捉えているものはほとんど見当たらない。</p> <p>数字や数字を含む四字熟語は人々の日常生活での成功した経験、失敗から得た教訓、科学的知識、文化的体験などを巧みに織り込んで、作り上げたもので、日本語においても、中国語においてもよく見られる。同じ意味を表す四字熟語にもかかわらず、日中両言語において異なる数字を使っているのはなぜか。それは日本と中国ともに、それぞれ独自の数字の意味的拡張と歴史、習慣、発想など文化的要素が内在しているからだと考えられる。</p> <p>日中両国は一衣帯水の隣国である。両国には紀元前からの長い文化交流の歴史があるため、日中両国の文化には類似したところ、共通したところが多く見られる。そのため、日中両言語における数字を含む四字熟語においても、その意味や用法において類似しているものが多数存在している。一石二鳥//一箭双雕、三人文殊//三臭皮匠、頂門一針//当头一棒、二股膏藥//脚踏二船、四字和平//四海升平、七歩之才//七歩为诗、八方美人//八面玲珑、九腸寸断//回腸九转などがその例として挙げられる。</p> |                         |

しかし、その一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なっているため、日中両国ではそれぞれの文化も形作られた。これは数字を含む四字熟語の意味や用法の面にも見られ、主に二つに分類することができる。一つは同じ数字を使って、異なる意味を表すものである。例えば、一日千金≠一日千金、一騎当千≠一马当先、七転八倒≠七颠八倒、一長一短≠一长一短、二人三脚≠二人三足、一刀両断≠一刀兩断、長舌三寸≠三寸之舌、朝三暮四≠朝三暮四、聚散十春≠十年生聚などがその例である。

もう一つは異なる数字を使って、同じ意味や類似した意味を表すものである。十人十色//一龙九种、二束三文//一文不值、三日坊主//一曝十寒、武士二言//一言九鼎、遮二無二//不顾一切、四之五之//说三道四、二進三進//一籌莫展、一枚看板//金字招牌、岡目八目//旁观者清、総領甚六//傻瓜老大、六菖十菊//明日黄花、五花八门//多種多様、五湖四海//津津浦浦などがその例である。

筆者は言語学的及び認知的観点と文化的観点を合わせて考えながら、日中両言語における「一」から「十」までの各数字を含む四字熟語に対して、それぞれ具体的な分析・比較対照を行った。以下では各数字ごとに順を追って紹介する。

数字「一」: 日中両言語における数字「一」の基本義は同じではあるが、詳しく分析すると、強調する意味に違いが見られた。日本語における数字「一」の基本義を「自然数の最初の数」と解釈し、「最初」という意味を強調する。基本義から「物事の最初」に拡張されるが、中国語の方はこの意味まで明確的に拡張されていない。普通は“最初”で表す。一方、中国語では数字「一」の基本義を“最小的正整数”と解釈する。“整数”は“整体”(全体)という意味を強調する。これは古代中国の哲学概念と関係があると思われる。中国には「大統一」という歴史があり、古代から数字「一」=“整体”という思想がすでに定着していたのである。

また、日本語において、数字「一」が「最高、最上、首位」という意味に拡張されている。そのため、日本では能力認定試験と項目評価において、「一級」が最上級とされる場合がほとんどである。これに対して、中国語自身が持つ柔軟な拡張性によって、数字「一」の意味が「最上」や「最下」という間逆の方向に延び、中国における各試験において「一級」は最上級と最下級とされる場合が共に存在する。これは日中両国における共通項目、類似項目試験(評価)に表された等級の上下が逆になる場合と共通する場合の両方に存在するのが理由であると考えられる。しかもその中に、中国語における数字「一」の基本義「最小的正整数」によって、中国における各試験において「一級」は最下級とされる場合が多い。

一方、中国語では「動作、現象が突然に現れ」、「動詞と動詞の間に入れて、動作が一回限りで、やってみることを表し、相手に軽く促す」などの意味が見られ、特に二つの数字が共起する場合、その意味は日本語よりさらに多彩である。例えば、数字「一」が「一」自体と共起する中国語の四字熟語は日本語よりやや少ないが、二つの数字「一」を同じ動詞と共に使うことにより、「動作の繰り返し」という意味が付与され、二つの数字「一」を同義の動詞と共に使うことにより、「動作の連続」という意味が付与される例も見られた。数字「一」が「二」と共起する中国語の四字熟語は日本語より遥かに多い。「繰り返し」、「列挙」、「程度の高さ」など特殊的な意味が付与されている例も見られた。

さらに、日中両国における認識や捉え方が異なっているところとして、日本人は「一期一会」と言うように、数字「一」を「最高、最上、首位」の意味拡張により、その機会は二度と繰り返されることがない、一生に一度の出会いであるということを重んじている。一方、中国人は“一生二熟”(初対面は見知らぬ同士、二度目はほほや親しい仲間) 一度目の出会いより、二度目の出会いをより重視するというように、数字「一」を含む四字熟語に付与されているイメージにも違いが見られた。

数字「二」:数字「二」は事物の対立、もしくは統一という認識に基づき、「同じではないこと、二種類、別のこと」、「対となる、並び称される」、「ちょっと、わずか、少し」、「二つ目、つぎ」などの意味を表す場合、「二」が現れる点は日中両言語に共通している。

“二龙戏珠”、“二姓之好”などのように、偶数「二」の「対となる」、「対称する」といったプラスのイメージが中国人の生活の隅々にまで浸透しているのに対し、日本人は不規則な非対称を重んじ、偶数「二」に対しては分裂、別れ、対立などの意味を連想するようである。このように、数字「二」を含む四字熟語に付与されているイメージに大きな違いが見られた。

また、両言語の四字熟語において、数字「二」は共に隣接する数字以外とは共起しにくいという傾向が見られた。数字「三」と共起する場合、両言語は共に「少なさ」、「変化」などの意味が見られ、中国語においては、“接二连三”などがあるように、「多さ、頻繁」という独特の意味が付与されている。また、数字「六」と共起する場合、日本語においては、「二六時中」のように、掛け算の結果十二という、面白い用法も見られた。

数字「三」:数に関する認識が「一、二」のみから、数百、千、万などに至るのに伴って、「三」も「多い」から「少ない」に認知され、それにより、数字「三」に「短い、少ない」というような意味が付与されている例が日中両言語にある。特に昔の日本で生活に欠かせなかった草鞋を安っぽい象徴として「二足三文」と喩え、「三文の値打ち」が「少ない」を表す例は中国語より日本語の方が量的に上回っていることが分かった。

中国において周の時代から三つの脚の“鼎”が一番安定した神聖な権威の象徴とされ、数字「三」を含んで、安定、平安、穏かさを象徴する“三足鼎立”、“三分鼎足”などのような中国語の四字熟語が多数存在している。伝統的思想において、人は天と地の次に位置し、数字「三」に天地人という特殊な意味が付与されている。また、中国語の「三」は“終”(ある期間の全体を示す、まるまるの)という意味も見られた。

日本語では仏の顔も三度までというように、「三」を超えて、四の五のを言われるとうるさく感じる。これに対して、中国語では「三」を含め、“说三道四”からがうるさく感じられる。数字「三」、「四」と共起する中国語の四字熟語は日本語よりずっと多い。“推三阻四”、“说三道四”などのように、多くは「あれ…これ…、雑、乱」という特殊なマイナスの意味が付与されている。また、数字「三」が「五」と共起する場合には“三年五載”などがあるように、「大体の数量」という意味が見られ、数字「三」がその倍数「六」や「九」と共起すると、“三茶六饭”、“三贞九烈”などのように、「程度の高さ」という意味も見られた。

一方、日本語の四字熟語において、数字「三」が「七」と共起する場合、「人三化七」などのように、「割合」という意味が付与され、また、数字「三」が「九」と共起する場合、「三思九思」などのように、「繰り返し」という特殊な意味が見られ、中国語では“千思万想”を用いて表す。

数字「四」:数字「四」が空間を知覚する四つの方向の産物という認識に基づき、「多数」、「東西南北、前後左右の四つの方向」、「あちらこちら、いたるところ」などの意味を表すのは日中両言語に共通している。数字「八」は「四」の最小の倍数であり、極大や無限の意味を含んでいて、「四苦八苦」、「四面八方」などのように、両言語における数字「四、八」の組み合わせは共に「すべてを含む、覆う」という意味が付与されている。

二つの数字が共起する場合には中国語において、数字「四」、「六」と共起する場合、中国古代から立体空間“六合”の宇宙観に影響され、“六通四达”のように、「各方面」という特殊な意味が付与され、また、“四不拗六”のように、「少数と多数の割合」という意味も見られた。数字「四」、「八」と共起する場合、“四停八当”、“四碟八碗”などのように、「程度の高さ」という意味が付与されている。

その一方、日本語では共起する数字「四」と「六」の掛け算の結果が二十四という意味用法が見られ、数字「四」が「四」自体と共起する場合、「四角四面」は四つの角と面がはっきりとしていることから、メタファーによって、角が立ち、真面目すぎて融通が利かず、面白みがない人に繋がっていると思われる。

さらに、発音的要因により、「四」という数が日中両国民共に「死」を連想させる。このため、数字「四」は忌み嫌われるが、古代中国では八卦、風水などの思想で数字「四」を吉祥の象徴する場合もあった。

数字「五」:日中両言語に共通して、数字「五」は「五番目」、「いつたび」などの意味を表す。

中国人にとっては数字「五」は「五行」と密接に結びついているため、数字「五」を含む四字熟語も日本語より多く見られ、その意味もずっと多種多様である。特に数字「九」と共起する場合、数字「九」は最大の陽数として、数字「五」は他の八つの数を貫通する核心の数字として、組み合わせて四字熟語に「帝王を敬う」という特殊な意味が付与されている。“九五之位”、“九五之尊”などがその例である。また、中国語では「五」は「午」に通じるため、“五花大绑”などのように、「交差する」という意味に拡張されている。二つの数字が共起する場合、数字「五」が「八」及び「十」と共起すると、「さまざま多彩」という新しい意味が付与されている。例えば、“五花八门”、“五光十色”などである。数字「五」が「六」と共起する場合、「反駁」、「否定」など数字「六」の拡張の意味用法に影響され、「変化する」と「あれ…これ…」というマイナスの意味も見られた。“五心六意”と“吆五喝六”がその例である。

一方、日本語における数字「五」は中国ほど高い関心が持たれていないようであり、数字「五」を含む四字熟語は仏教用語以外、主には体と関わっている。「五臓六腑」、「五体満足」などがその例である。また、数字「五」が「五」自体と共起する場合は「五分五分」などがあるように、「等比例」という新たな意味が付与されている。

数字「六」:日中両言語は共に「六番目」、「人を卑しめ、罵る」などの意味を表している。中国語には数字「六」が数字「七」及び「九」と共起する場合、「あらゆる」という特殊な意味が見られ、“七情六欲”、“六街九陌”などがそれにあたる。その一方、日本語では数字「八」と共起する場合、「八面六臂」などがあるように、「多い」という意味が付与されている。

日中両国における認識や捉え方が異なっているところとしては、中国語における古来の思想は《易经》の中で数字「六」は順調を象徴するものとされ、漢字“禄”と発音も似ているため、帝王の制度から祭祀儀礼にいたるまで、“六六大顺”と言うように、数字「六」に「順調」という象徴的な意味が付与されている。別の説では漢語の方言の“六”はペー族の「充分」という言葉と発音が似ているため、贈られたものの多少にかかわらず、「六」があれば充分という意味が付与されている。これに対して、日本では「六曜星」などに関わっており、数字「六」は縁起がよいとまでは思われていないものの、重視されていると考えられる。

数字「七」:数字「七」に「何度も、たくさん」、「人が死んだ時、死後七日目ごとに行う仏事」などの意味が日中両言語に共通している。中国語において、甲骨文の「七」は一本の縦の棒に横一本を付け加えるため、分割、切るなど、忌み嫌う傾向があり、数字「七」を含む四字熟語の多くがマイナスの意味を表しているようである。哀しいという意味を含む文学作品の創作上の体裁や命名などに繋がるものが多く存在する。“七谏七发”、“七哀之诗”などがその例である。他の数字と共起する場合、数字「八」と共起するケースが圧倒的に多く、「乱雑、揃っていない」という意味が付与されている場合が多い。“杂七杂八”、“七手八脚”などがその例である。

一方、日本ではキリスト教の影響もあり、「七珍万宝」、「七之福神」などがあるように、数字「七」が「ラッキー7」として好まれているようである。他の数字と共起する場合も、中国語と

同様、数字「八」と共起するケースが多いが、「七転八起」などのように、プラスあるいは中性的な意味を表すものが多いようである。

数字「八」: 数字「八」を含む四字熟語を全般的に見れば、日中両言語の間に「八の字の形」、「たくさん、多い」など、多くの共通点が見られた。

中国語の数字「八」には「大体の数字を示す」という意味が見られ、例えば、“万儿八千”、“块儿八七”、“十头八个”などである。その一方、日本語では盗人仲間の隠語で、相手と呼ぶ時の仮の名として用い、賭博仲間の間で花札賭博の一種を「八八」と呼ぶことがあるという中国語には見られない用法が確認できた。

日中両国における認識や捉え方が異なっている点としては日本語では「八」という字形が上が狭く下が広いため、歩けば歩くほど道が広がり、事業がますます隆昌することを連想させる。また、中国語では「八」の発音が中国語の方言の一種である広東語では“发”(儲かる、金持ちになる)と似ている。このようなことから、日中両国で数字「八」は共に縁起がよい数字と見なされ、プラスのイメージの四字熟語が多い。また、日本語では「天之本」などのように、数字「八」に脅威を感じさせたり、力量に勝れているという特殊な意味も付与されているようである。

数字「九」: 数字「一」から数字「十」の中で、「多数、多い」という意味を表す数字は「九」だけではない。しかし、数字「九」は極限を表す唯一のものだと言える。日中両言語において、共に数字「九」に「九度、九たび」、「数のきわまり、極めて数の多い」、「陽を象徴する数」など意味が付与されている。

中国語において、“数九寒天”のように、冬至の当日からの9日間を“九”と言い、“九九”(81日)まで続くという意味に拡張されている。また、中国語の数字「九」は“久”と発音が同じであり、字形も似ているため、縁起のよい数字と考えられ、それを含む四字熟語にはプラスの意味を表すものが多いことが分かった。

一方、日本語においてはその発音が「苦痛」、「苦しい」の「苦」という人々の価値とまったく逆方向のものと繋がり、忌み避けられた。発音により、日中両言語において異なるイメージを生み出し、四字熟語に付与されている意味にも違いが認められた。

また、二つの数字を含む四字熟語には数字「十」と共起する場合、両言語において共に「高い割合」という意味が付与される以外、中国語では“十亲九故”などのように、「多い、たくさん」という意味も付与された。一方、日本語においてはこのような使い方は見られない。

数字「十」: 数字「十」は日中両言語共に「すべて、完全、満ちたりて不足のないこと」、「垂直に交わる形」などの意味に拡張され、類似している点が多い。

中国語において数字「十」は《易经》の占筮において究極の“成数”であり、神秘的、かつ円満であることを表している。日本語の数字「十」も中国語と同じように《易经》の影響を受け、数字「十」を多い、長い、遠いなどの意味としたさまざまな四字熟語がある。特に数字「十」を時間の尺度にする四字熟語は多く見られ、例えば、「苦節十年」、「十年寒窗」などである。このような四字熟語における「十」は大半が実際の数ではなく、誇張など修辞の機能をもつものである。中国語において、「十」は“什”に通じるため、「雑、混じる」という意味に拡張され、“十锦”はいろいろな材料を使い、また多種類のものを取り合わせた料理、食品を指している。一方、日本語における数字「十」はこの意味までは拡張されていないようであり、“十锦飯”の場合、日本語では「五目飯」で表す。

また、数字「十」は「拾」(合わせ集める)と語源が同じであるため、「一」から「九」を合わせたものをイメージし、数字「十」を含む四字熟語に「すべてを包みこむ、完全」という象徴的意味が付与されている。日中両言語に共通する「十全十美」などがその例であり、中に潜んでいる日中両国民の美意識が類似しているが、日本では「間」意識である根底には不完全なものを重視する美意識も存在すると言え、「余情」が大切にされているようである。

結論として、本論文はまず「一」から「十」までのそれぞれの数字の基本義と派生義を比較対照し、その共通点と相違点を明らかにした。次に「出典元」と「構成」について、「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類し、統計をとり、その全体像を把握した。その次に、数字を含む四字熟語の比喩的意味は主にそこに含まれている数字の拡張的意味に多く見られ、それと深く関わっていることを明らかにした。さらに、二つの共起する数字を含む四字熟語はそれらの数字によって新しい意味が付与されたことも明らかにした。日中両国は一衣帯水の隣国であり、両国には紀元前からの長い文化的交流の歴史があるため、日中両国の文化には類似したところ、共通したところが多数あった。日中両言語における「一」から「十」の数字を含む四字熟語を考察対象として、それぞれ意味・用法の側面から対照研究を行ったところ、数字に対する認識が日中両国で非常に高い類似性を示し、それらを含む四字熟語においても、その意味、用法、そして認知において類似しているものが多数存在していることが確認できた。

しかし、その一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なっているため、それぞれ異質な文化が形作られたことも極めて当然のことである。これは数字を含む四字熟語にも見られ、たとえ同じ数字であっても異なった理解、発想、そして捉え方をし、その反対するものも存在する。数字を含む四字熟語の意味や用法、認知において、その違いが如実に反映され、多くの差異を確認することができたと言える。

論文審査の結果の要旨

(別紙2)

|      |                         |
|------|-------------------------|
| 氏名   | 李叶                      |
| 論文題目 | 日中両言語における数字を含む四字熟語の対照研究 |

要旨

本論文は言語学と文化学の視点から日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を対照研究し、数字の拡張的意味と四字熟語の比喩的意味が如何に関連するか、また日中両国におけるそれぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的なものが数字を含む四字熟語の意味に対して如何に影響しているか、数字を含む四字熟語の比喩的意味は文化に如何に反映されているかなどについて究明した。

これまで日中両言語における数字及びそれを含む四字熟語に対する研究は全般的に見ると、日本における研究では通時的研究が多く、主に日本語における数字の発展史に関する研究である。数字を含む四字熟語の研究について、その数は少なく、あまり進んでいないようである。対照研究の面においては日英対照がほとんどで、日中対照研究がテーマとして取り上げられたケースは少ない。これに対して、中国では比較的以前から「数字を含む四字熟語」が研究テーマとして取り上げられ、研究は進んでいる。しかし、意味、用法の側面からのものがほとんどである。日中対照研究をテーマとして取り上げるケースがいくつかあるものの、主に一つの数字、もしくは二、三個の数字に絞って行われたもので、数字全体を体系的に捉えているものはほとんど見当たらない、本論文は体系的、包括的に対照研究を行った。

数字の意味的拡張は四字熟語における数字の語彙自体、ないしはそれを含む四字熟語の意味にも影響を与えられ考えられる。そのため、本論文では先ず、日中両言語における「一」から「十」までのそれぞれの数字の基本義と派生義を分析した。「出典元」と「構成」については日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類し、統計をとり、全体像を把握し、各方面の全体像を図式化し、比較対照図にした。

その上、言語学的及び認知的観点を合わせて、①両言語ともに同じ数字を含み、同義・類義を表すもの;②両言語ともに同じ数字を含み、異義を表すもの;③一方の言語で数字を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すものの三つに分類し、日中両言語における数字を含む四字熟語が持っている意味用法をめぐって研究を行った。

さらに、日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語が日中両国の文化にどのように反映されているか。また、それぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的要素がそれら四字熟語の意味に対して、どのように影響しているかについて究明し、以下の結論に達した。

数字を含む四字熟語の比喩的意味は主にそこに含まれている数字の拡張的意味に多く見られ、それと深く関わっていた。また、二つの共起する数字を含む四字熟語はそれらの数字によって新しい意味が付与されたことも明らかにした。

また、日中両言語における「一」から「十」の数字を含む四字熟語を考察対象として、それぞれ意味・用法の側面から対照研究を行ったところ、数字に対する認識が日中両国で非常に高い類似性を示し、それらを含む四字熟語においても、その意味、用法、そして認知において類似しているものが多数存在していることが確認できた。日中両国は一衣帯水の隣国であり、両国には紀元前からの長い文化的交流の歴史があるため、日中両国の文化には類似したところ、共通したところが多数あったからである。

その一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なっているため、それぞれ異質な文化が形作られたことも極めて当然のことである。これは数字を含む四字熟語にも見られ、たとえ同じ数字であっても異なった理解、発想、そして捉え方を示し、その反対するものも存在する。数字を含む四字熟語の意味や用法、認知において、その違いが如実に反映され、多くの差異を確認することができたと言える。

本論文は言語学、認知学、文化学、社会学など多くの領域における学術的な意義を持っており、第二言語の習得やコミュニケーションにおける誤解を未然に防ぐことができるなど、現実的かつ有意義な研究だと高く評価できると思う。

今後の課題として、筆者が引き続き今回考察した日中両言語における数字を含む四字熟語を更に深く、細かく追究し、研究することを大きい期待している。

審査委員

| 区分 | 職名 | 氏名   |
|----|----|------|
| 主査 | 教授 | 靳衛衛  |
| 副査 | 教授 | 仁田義雄 |
| 副査 | 教授 | 山梨正明 |

最終審査の結果の要旨

(別紙 3)

|  |           |
|--|-----------|
| 氏 名  | 李 叶       |
| 試 験 科 目  |           |
|  |           |
|  |           |
|  |           |
| 判 定  | 合 格・不 合 格 |
| 要 旨  |           |
| <p>学位申請者の研究成果を確認し査定するために、博士請求論文を中心に口述試験を実施した(平成28年7月12日)。</p> <p>論文は、別紙審査報告に書いたように、言語学と文化学の視点から日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を対照研究し、数字の拡張的意味と四字熟語の比喩的意味が如何に関連するか、また日中両国におけるそれぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的なものが数字を含む四字熟語の意味に対して如何に影響しているか、数字を含む四字熟語の比喩的意味は文化に如何に反映されているかなどについて究明したものである。</p> <p>その研究成果は画期的で、独創的であり、第二言語の習得や日中コミュニケーションにおける誤解を未然に防ぐことができるなど、現実的かつ有意義な研究だと高く評価できると言えよう。</p> <p>口述試験においても論文内容の質問については明確に答えることはできたと判断する。</p> <p>申請者の外国語の試験については、日本語により作成された学位論文の内容とその日本語、及び英語、中国語の要約によって、申請者の意図が十分に表現されていると判断されたので、試験を免除した。</p> <p>審査委員一同は、慎重に審査した結果、申請者の論文は博士(言語文化)の学位に値するものと認め、審査委員一同、学位授与を適格と判断し、合格と判断した。</p> |           |

| <p>審査委員</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">区 分</th> <th style="width: 35%;">職 名</th> <th style="width: 50%;">氏 名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>主 査</td> <td>教 授</td> <td>靳 衛衛</td> </tr> <tr> <td>副 査</td> <td>教 授</td> <td>仁田 義雄</td> </tr> <tr> <td>副 査</td> <td>教 授</td> <td>山梨 正明</td> </tr> </tbody> </table> |     |       | 区 分 | 職 名 | 氏 名 | 主 査 | 教 授 | 靳 衛衛 | 副 査 | 教 授 | 仁田 義雄 | 副 査 | 教 授 | 山梨 正明 |
|--|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-------|-----|-----|-------|
| 区 分  | 職 名 | 氏 名   |     |     |     |     |     |      |     |     |       |     |     |       |
| 主 査  | 教 授 | 靳 衛衛  |     |     |     |     |     |      |     |     |       |     |     |       |
| 副 査  | 教 授 | 仁田 義雄 |     |     |     |     |     |      |     |     |       |     |     |       |
| 副 査  | 教 授 | 山梨 正明 |     |     |     |     |     |      |     |     |       |     |     |       |